科学と女性問題

丹治　陽子

Science and the Woman Question

Yoko TANJI

1. アラベラ・ケニーリ

1890年の*The National Review*に、'The Talent of Motherhood'（「母性の才能」）というタイトルの論文が掲載されている。著者はアラベラ・ケニーリという女性である。

彼女は勅撰弁護士ウイリアム・ヴォーン・ケニーリ（1819-1880）の娘で、サセックス州ポーツレイドに生まれる。当時、中産階級の娘たちの多くは学校教育を受けずに家庭教師によって家庭で教育されていたが、ケニーリも同様であった。その後、彼女はロンドン女子医学校（London School of Medicine for Women）で医学を修め、1888年から1894年にかけてロンドンおよびロンドン近郊の都市ウォトフォードで医院を開業する（彼女の生年は不明であるが、開業の年から判断すると、だいたい1860年代前半の生まれだろうか）。

ロンドン女子医学校が開校したのは1875年のことだから、彼女はその学校の草創期の卒業生のひとりとして、女性にたいして門戸が開かれたばかりの医学を学んで知的職業に就いた、ひじょうに進歩的な女性だったということができる。しかも、*The National Review*のような当時としては一流の総合雑誌に論文を発表する一方で、1893年には*Dr Janet of Harley Street*という小説を公刊してもいる。

その後彼女は重いジフテリアに罹って健康を害したために、1894年には医者としての仕事をやめざるをえなくなったが、1938年に亡くなるまで、多くの小説、および医学や倫理問題についての著作を積極的にあらわしつづける。一生涯独身をつらぬきながら（彼女の著作のひとつに*The Marriage Yoke*（1904）というタイトルのものがある）、医学から文学におよぶ自分の知的才能を十全に開花させた女性として、彼女は当時としてはもっとも進歩的な女性、1894年に定着した言葉を用いれば「新しい女」のひとりだったように想像される。

そのような著者の姿を想像しながら「母性の才能」という論文を読む読者は、その論文に驚かされることになる。その結論が反進歩的だからだろうか。たしかにそれもある。しかしそればかりではない。そこにいたる論理が、現代のわれわれにとってはいかにも滑稽に思われるからである。どうしてケニーリのような知的な女性がこのような滑稽な論理を用いているのだろうか、と読者は自問せざるをえないだろう。

だが、彼女がそのような滑稽な論理を信じることになったのは、彼女が知的に劣っていたからではなく、じつは知的に優れていたからなのである。われわれにとって彼女の論理が滑稽に思えるのは、彼女の論理が前提としていた女性をめぐるイデオロギーが、この1世紀のあいだに顕著に変化したからなのである。

本論文は、19世紀末において女性をめぐるイデオロギーの主流がどのようなものであったか

を知るための興味深い資料としてケニーリの「母性の才能」を紹介することを目的とする。そのうえでそのイデオロギーがこの1世紀のあいだにどのように変化していったかにもふれることになるだろう。

2. グレアム夫人

ケニーリは、数年前、彼女が医者になりたてのころに診察した、ふたりの対照的な性格の女性患者のエピソードから、論文をはじめる。

ひとりめの患者は、かりにグレアム夫人と名づけられている。「知的な広い額に、聡明そうな明るい目をした、端麗な25歳ぐらいの女性」であった彼女は、「顔をまっすぐにもたげ、しっかりとした速い足どり」で診察室に入ってきた。背は高く、身のこなしには「力強さ、決断力、活気」があふれ、目のきらめきや血色のよい頬の色からは「すばらしく健康である」ことが見てとれる。また、きりりとした口もとには、「かなりの意志の強さと自制心」があらわれている。そのような彼女には「ほとんど病人らしいところはなかった」、とケニーリは述べている。

夫人は、自分たちが今生きているのは、女性が肉体的にも精神的にも「解放され、発展し、その力が成熟を迎える栄誉ある時代」であり、女性は将来あらゆる分野で男性と同等の力を発揮するようになるだろうと熱っぽく語る。ケニーリは女医であるから、「女性の支援者」である自分のそのような考えを理解してくれるだろうと思い、彼女を訪ねてきたのだ。夫人は結婚して1年たち、「自分の人生を完成させるために」母親になることを楽しみにしている。彼女はこれまで、たゆまぬ努力によって自分の精神と肉体を鍛えてきたので、その獲得形質が子どもに遺伝し、「人類の模範となるような子ども」が生まれることを期待しているのだ。

しかしこのように野心的で元気溌剌としたグレアム夫人も、以前は「虚弱（delicate)」で「感傷的（sentimental)」な少女だったという。これは、当時の中産階級の少女としてはごくふつうの、というよりむしろ当然そうあるべき姿だったといってもいいだろう。ヴィクトリア朝の女性をめぐるイデオロギーを「女嫌い」の観点からあつかった『倒錯の偶像』のなかでブラム・ダイクストラが述べているように、19世紀はむしろ病弱である女性が美化される時代だったのだ。

だが、彼女は女性の高等教育についての論文を読んで、「虚弱」で「感傷的」な少女であることに疑問をおぼえる。そして16歳で、当時まだできて間もない女子の高等学校に入学し、ラショナル・ドレス（合理服）を着用する「新しい女」（この言葉じたいはまだ存在していなかったが）となる。コルセットによる拘束から自由になった合理服は、自由に活動する女性であることを示す記号であったのだ。女性は激しい運動を控えるべきであると考えられていた当時にあって、彼女は兄弟とテニス、クリケット、ボート漕ぎや競走を楽しみ、ともに体を鍛える。また、兄弟がケンブリッジ大学に入学すると、彼女も同大学ガートン・コレッジ（女性専用のコレッジとして1869年に創設されていた）に入学し、伝統あるトリニティ・コレッジでディレッタント風に勉強する兄弟をしりめに猛勉強をして、彼らよりはるかによい成績をとる。そして卒業後は、銀行家の父のもとで働くことになったのである。

「男たちが精神的、肉体的に努力してなしとげることで、女にできないことはない」ということを実証してみせた彼女は「人生に満足していた」。だが、彼女は「結婚することは義務だ」と感じる。彼女のような進歩的な女性でさえも、社会の基盤は家庭にあり、結婚して健全な家庭を作ることが人間としての義務であると考えていたのである。彼女が夫に選んだのは、「いままで

に出会った中でもっとも教養があり興味深い男性」であった。

しかし彼女は結婚後も家庭に閉じこもることはなかった。家政婦に家事を任せて（彼女の収入は家政婦の10倍だった）、夫のオフィスで仕事をつづける。彼女は、多くの女たちがおくっている「目的もなく退屈な」生活より、「目的と努力」に満ちた自分の生活の方がいかにすばらしいかを伝えて、女性を啓蒙したいと考えていたのだった。だがそれだけではなかった。「目的」をもち、そのために「努力」をつづけることで人類の進化に貢献したいという意志をも、彼女は表明している。

> 私の一日には、明確な意図によって管理されていない時間は一瞬たりともありませんでした。こうして能力の道筋をつねに方向づけることによって、私たちはそれらを完全に管理し、能力を高め、私たちの力をはかりしれないほど増強させるのです。このように考えるならば、長年にわたって女性の才能という財産が休眠状態にあったことが、世界にとってどれほどの損失であったか、ひじょうに残念に思わずにはいられません。これまでは人類の才能と力の二分の一が、それを発展させる機会と教育に恵まれなかったために、発揮されずにいたのです。もしもこのような状況でなかったならば、進化はさらに進んでいて、人類は過去のちょうど二倍のペースで進歩していたかもしれません。教養があり、活動的な四肢をもち、十分に発達をとげた女性は、もっと発達した子どもを産んでいたにちがいありませんし、人間がゆりかごを出るのに、いまほど時間がかかることはなかったでしょう。(Kenealy 249)

子どもは母親の肉体的、精神的能力を受け継ぐにちがいないのだから、自分の能力を極限まで発達させることによって、健康で活力にあふれた才能豊かな子どもを生もう、そしてそのことによって人類の進化を二倍のペースで進めようというのが、グレアム夫人の発想なのである。自分を人類の進化という歴史の流れのなかに位置づけた壮大な発想ではあるが、もちろんこれは獲得形質の遺伝という原則を前提にした、いまでは科学的に否定されている考え方にすぎない。しかし獲得形質の遺伝というのは、当時の科学的イデオロギーのなかでは肯定されていた理論であった。

たとえば1859年に『種の起源』を発表したダーウィンは、1860年代になって遺伝のプロセスを説明する必要からパンジェネシス理論を創造していた。この理論は、「身体のあらゆる細胞から放出され、体液によって胎内を循環し、最終的に生殖器に到達し、性細胞と結合する物体」（ラセットp.89）としてのジェミュール（遺伝粒子）と呼ばれる存在を想定していた。ダーウィンは鍛冶屋を例にとり、腕力が強くなるという鍛冶屋の肉体的な変化は、その腕の細胞から出てくるジェミュールに影響を及ぼし、この獲得形質が生殖細胞をとおして子孫に伝わると述べている。したがってそれは獲得形質の遺伝を肯定する理論であった。

「自分の信条が認めるものすべてにたいして証拠や論理的な主張を求める」グレアム夫人は、おそらく彼女が高等教育によって得た、当時の最先端の科学的、生物学的理論にのっとって行動していたのである。「新しい女」としての「信条」を進化論の枠組みのなかで理論づけていった彼女のこのような行動は、ダーウィニズム以後のほとんどすべての知識人がおこなっていたことであった。

3. イーデン夫人

ケニーリが紹介するもうひとりの患者はグレアム夫人と対照的な女性である。イーデン夫人とかりに名づけられている彼女は、グレアム夫人と同じ年頃の「慎ましやかで病弱そうに見える女性」で、「青白くて神経質そうな顔」に「思いに沈むまなざし」をしている。「不安そう」に入ってきた彼女の細い体は、「観察」されると「縮み上がってしまうよう」に見え、口もとも感情を抑えられずに「頼りなげ」で、「内気」そうにみえる。痩せて「病弱のように見える」が「姿勢は良く」、「身のこなしは優美」である。ただ、このときは「決心がつかないようす」で「おずおず」としていた。「神経過敏で不安なようす」だが明るいまなざしをしており、顔色は蒼白ではあるけれど、不健康というわけではない。

ためらっているような患者を迎えいれようとケニーリが立ちあがると、イーデン夫人はさっと近づいて「彼女の手にしがみつき」、「目にいっぱい涙をため」、「私、母親になるのですけれど、どうしたら私の小さな赤ちゃんのために一番いいことをしてあげられるか教えてくださいませんか」という。そのとたんに涙が頬を伝うが、それを拭い、微笑みをうかべると彼女は、「私ったらばかみたいですわね。でも、とてもすばらしいけれど、とても怖いのです」と続ける。ケニーリが安心させようとすると、夫人は「自分のことで怖がっているのではありません。(赤ん坊は)とても神聖な預かりもの、すばらしい驚きなので、私は自分がなにかまちがったことをするのではないか、このいたいけな、育ちつつある生命を傷つけてしまうのではないかしらと怖れているのです」と答える。彼女は身体や精神に障害のある子どもを見るにつけ、自分の子どもが同じような運命をたどるのではないかと怖れていたというのだ。

グレアム夫人とあまりにも対照的なイーデン夫人に興味を持ったケニーリは、彼女が母親になるということについてどう考えているのか聞きだそうとする。だが、彼女には持論などなく、子どもを産むという「責任の重大さ」をひしひしと感じるようになるまで、そんなことは考えたこともなかったという。

ケニーリはイーデン夫人の話を聞きながら、彼女の「虚弱さ」は病気に起因するのではなく、「とても緊張し、敏感で」、「もっと鈍感な器官ならば感じないような接触にも震動する」彼女の神経組織から来るものだ、と判断する。そしてグレアム夫人よりも「義務」や「愛情」を「認識する」点では劣っているかもしれないが、しかし「思いやり」、「情緒」、「想像力」という点ではイーデン夫人のほうがはるかにすぐれている、と思う。「魂のあこがれ」に応えたり、「傷ついた心」を癒したり、「天国の入り口においてうち震える人間の愛や熱望という精神」を理解するというような、「感情のより高い領域」で活躍できるのはむしろ「虚弱」なイーデン夫人のほうであろう ── そう述べるケニーリは、彼女のなかに、「家庭の天使」と名づけられたヴィクトリア朝的女らしさの典型を見ていたのである[1]。

そのような女性らしい女性のひとりとして、イーデン夫人は「たいがいの女性らしい女性がそうであるように、本質的に芸術的な資質の持ち主」であり、「偉大な作品を生み出すほどの才能」はなかったのものの、「優美な絵や美しいスケッチ」を描けばそれなりの出来映えを示していた。しかしそのような彼女の「精神的な創造力が、奇妙なことに、出産前の期間中はいっさい失われてしまったようにみえた」ことに気づいたケニーリは、「あたかも精神と肉体の創造力にはなにか密接な関係があるようで、後者が母親になるために引き出されているあいだは、精神のレベル

においてこれに対応する機能は停止しているようだった」と述べている。

グレアム夫人が肉体的にも精神的にも自分を向上させようと妊娠中も努力をつづけていたのにたいして、イーデン夫人は妊娠したのちはこのようにしてその唯一の創造的な活動も中止し、「私のすべての力が小さな生命へと注ぎこまれる」のを感じながら、子どもへの愛情をつのらせていく。そしてこのように対照的なふたりの母親を診たケニーリは、「どちらがより高級で真実の女性の模範なのだろうか」と自問するのである。

ケニーリにとってこの問いは、たんに時間が解決してくれる問題にすぎない。なぜなら彼女は、「女であることの本質」が「母親であること」にあり、女性が「この義務を正しく履行することに人類の進化がかかっており」、したがって母親になるという「このすばらしい機能にもっとも適した女性」こそが「最高に発達した女性」である、という結論を出しているからである。どちらの夫人が模範的な女性か、それは生まれてくる子どもを見れば一目瞭然というわけなのである。

4. ケニーリの結論

そしてふたりの母親にそれぞれ男の赤ん坊が生まれ、ケニーリはみずからの問いにたいする答えを得る。それも明々白々な答えを。

みずからの心身を鍛えることによって優秀な次世代を残そうとしたグレアム夫人の努力にもかかわらず、彼女の赤ん坊は「人類の平均をはるかに下まわって」おり、気丈な母親も子どもを見た瞬間におもわず恐怖と失望の声をあげたほどだった。「弱々しい発育不全の体格、狭い額、十分に発達していない頭部、くぼんだうつろな目」をした赤ん坊を、彼女は義務感をもって懸命に育てる。だがその子は、「健康においてと同様、知能においても同年代の子よりはるかに発達が遅れ」ていた。「狭くて突き出た額、おちくぼんだ狡猾そうな目、官能的な口」をしたその子は、「知能はひどく劣り、浅薄で怒りっぽくわがままで、道徳的理解力に著しく欠けていた」のである。「力強く美しく独断的なアマゾンがピグミーを生んだ」とまで述べるケニーリは、グレアム夫人の子どもを「退化した子ども」と呼び、彼においては「明らかに進化が逆戻りしてしまった」と考えるのである。

それにたいしてイーデン夫人の子どもは「明るく、健康で、丈夫な四肢」をもち、「すぐれた知性を示し、並外れた才能に恵まれ、学識豊かな人物になることが確実」にみえる。「美しく知的な頭部と顔、たくましい体格、すばらしい精神力」を備えたこの子どもは、「しっかりした目的」と「愛情深く寛大な心」の持ち主でもある。この子について、ケニーリは「人類を等級づけしたらその第一位」にはいる、「進化が二段階先へ進んだ」子ども、「英雄として生まれた」子どもとして絶賛している。

どうしてこのような明暗が生じたのか。どうして肉体的にも精神的にもすぐれていたグレアム夫人の子において「進化が逆戻りしてしま」い、逆に「虚弱」だったイーデン夫人の子において「進化が二段階先に進」むという事態が起こったのか。ケニーリによれば、このようなことが起こったのはけっして「偶然」ではなく、「大きな力をもったなんらかの原因」が作用したからなのである。

その「原因」とはなにか、ということをケニーリはつぎのようにまとめている。

未分化の力の蓄えを残すことなく、能力を十分に発達させ錬磨するような教育は、それをおこなうことによって次世代の力の資源を使い尽くしてしまうので、次世代には有害な影響をあたえるだけである。子どもの誕生に先立つ期間に、商売や知的職業に従事したり、また社交に励むなどして絶え間ない緊張にさらされていると、母親の肉体的、精神的落ち着きが妨げられ、また、胎児のしかるべき成長と進化のために必須の神経組織の力が消費されてしまうため、その影響はその人の子どもの肉体的、知的、道徳的劣等性として必ずあらわれるのである。(Kenealy 254)

ケニーリは、妊娠中のやつれた様子もなく精力的に「読んだり、書いたり、商売をしている」グレアム夫人を見て、「あなたのような状態で（つまり妊娠中に)、そんなにエネルギッシュで活動的な生活を続けていると、子どものための蓄えを利用することになってしまいますよ」という忠告を与えていたが、それは上記の引用にみられるような考え方から出ていたのである。

ここにみられる、「次世代の資源を使い尽くしてしまう」、あるいは「子どものための蓄えを利用することになる」という考え方は、19世紀半ばの物理学が発見した熱力学第一法則（閉じた系におけるエネルギーの保存）を人間の肉体に応用したものとして、当時としてはじゅうぶん科学的な根拠をもつものだった[2)]。そしてこの理論は、女性の高等教育や社会進出をはばむことを正当化するためにしばしば使われていたのである。

エネルギー保存則とは簡単にいえば、「エネルギーは作られることも、破壊されることもなく、あるシステムのエネルギーは、運動のための有用性は減少しても、常に一定に保たれる」（ラセット140）というものである。当時は、「人間の肉体には一定のエネルギーしか備わっていない」と考えられていた。このふたつの考え方を前提とすると、人間の生命エネルギー消費については、「ある部分の活動が激しくなると、限られたエネルギーの蓄えを過度に消費することになるので、他の部分は一時的に弱体化する」（ラセット148）ということになる。つまり、思考や感情に多くのエネルギーを使うと、肉体のエネルギーがそこなわれて健康を害することになるから、男女ともに、過度の思考や快楽の追求は慎み、自然が定めた、本来それぞれの性が行うべき仕事に励まなければならないということになるのだ。

とくに女性の場合は出産に関係する女性に特有の負担があり、これにまつわる器官が形成される思春期には膨大なエネルギーが消費されなければならないと考えられていた。もしもこの大切な時期に女性のエネルギーが他のこと、たとえば男性と同等の学問やスポーツのために浪費されると、卵巣等の器官は正しく形成されず、優れた次世代を産み育てることができない不完全な女性ができあがってしまう。したがって、人類の衰退や滅亡という危機を回避するためには、たとえば男子と同じ内容の女子高等教育をすべきではないというのである。そして正しい女子教育の内容は、「家庭の天使」の役割にふさわしい、絵画、ピアノ、ダンスなどの社交上のたしなみ(accomplishments）にとどめておけばよいとされ、女性の教育の機会を閉ざすことが正当化されたのである。

またたとえ女性の「エネルギー・レベルが男性と等しいと考えたとしても、20歳から40歳までのあいだ、その20％が『母性の維持とそれにともなうつらい仕事』にさかれてしまう」（ラセット138）とも考えられていた。これは、思春期をへて40歳にいたるまで、女性を母親という役割に拘束し、社会進出の機会を与えないための論理だったといえるだろう。

このような当時の考え方をたどると、女医であるケニーリがグレアム夫人をどのようにみていたかがあきらかになる。グレアム夫人は思春期に教育やスポーツにエネルギーを使っているので、見かけは健康そうだが、出産のための器官が十分に発達しているかどうか疑わしい。そのうえ仕事にエネルギーを費やして、出産と育児のために蓄えておくべき20％のエネルギーをすでに消費してしまい、胎内で健康な子どもを育てるためのエネルギーが失われていたために、発育不全の子どもが生まれざるをえなかったということなのである。

ケニーリはこのようにエネルギー保存則という当時の科学理論をもって、グレアム夫人の過失を指摘しているのだ。それと同時に、「胎児はその発達過程において、人類が上昇してきた進化のさまざまな段階を通過する」という、いわゆる「生物発生原則」により、グレアム夫人の子どもの「退化」現象を説明する。

> その母親の力が欠乏していると想定するならば、その子どもの進化が急に止まるかもしれず、人間としての発達がより低い段階で阻止され、その子が産まれてくる時代よりももっと前の時代の、より劣ったタイプが生じるかもしれないと仮定するのはむずかしいことではない。(Kenealy 254)

こうしてケニーリは、物理学と生物学からなる当時の科学的理論を根拠にして、社会に進出したうえ、さらに完璧な母親であろうとするグレアム夫人の新しい考え方を否定し、そのいっぽうで、イーデン夫人という理想の女性像を示すことにより、聖母子像にみられる「聖なる御子の理想的母親」という理想にたちかえることを読者に求めているのである[3]。

ケニーリ自身が医学教育を受け、実際に医師となった最初期の女性のひとりであったことを考えるならば、これはなんという意外な結論であろうか[4]。しかしこれはたんなる自己矛盾なのではない。これはおそらくは、高度の知的教育を受けたことのある現役の医師として、彼女自身が結婚して母親となるという考えを、この時点で放棄していたということを意味するものなのであろう。

5. 当時の男女観

ケニーリとグレアム夫人は、ともに、女子高等教育を受けて、それぞれに専門的な職業をもつ、中産階級の進歩的な婦人たちである。また生物学の最先端にあった進化論を論拠にして、女性が優秀な子どもを産むことにこそ人類の未来がかかっているという考え方においても、ふたりの意見は一致している。それなのに、ふたりが理想とする女性像はなぜ正反対のものになってしまったのだろうか、そしてそれぞれの女性像は、当時の男女観のイデオロギーとどのような関連をもっているのだろうか、ということをつぎに考えてみたい。

グレアム夫人と女医ケニーリとは、当時の多くの女性たちがおかれていた状況から考えると、進歩的な思想を実生活において実践することができた特別に恵まれた例、一般の女性のあり方からおおきく逸脱して「男性の領域（sphere)」を侵略しはじめた女性の例だといえるだろう。一般の女性は父権制社会のイデオロギーに支配され、「女性の領域」のなかで生活をしていたのである。

このような「男性の領域」と「女性の領域」という区別が顕著になってくるのは、産業革命以

後、男性が家の外で労働するという、いわゆる職住分離が定着した頃のことで、それは歴史上比較的新しい出来事だった。それまでは家庭はそのまま労働の場でもあった。しかし職住分離により男性が家の外へ出て働くようになるにつれて、とくに中産階級において、家庭は女性が守るべき「女性の領域」として意識されはじめ、「男性の領域」の中で肉体的精神的に疲弊し道徳的に堕落して帰ってきた男性を、「家庭の天使」である女性が癒し高める神聖な場所[4]へとそれは変化していったのである。

そして男性と女性の役割はこのような動向に応じて明確に分化しはじめ、それにともなって19世紀半ば以後、そのような男女間の役割の差を生物学的な能力の差から正当化しようとする試みがあらわれ、父権制を正当化する論理として一般化していく。その典型的な試みは、たとえばジョン・ラスキンの『ごまとゆり』(1865) のなかの「女王の花園」に認められる。

> まるで同一の事柄について男女両性の比較が可能であるみたいに、一方の性が他方の性に「優越」していることをうんぬんするのはばかげたこと、しかも弁解の余地のないほどばかげたことです。両性はそれぞれ相手のもっていないものをもっており、相手を補い、相手によって完成されるのであって、両性に似ている点はないのであり、両性の幸福と完成は、それぞれ一方が、相手だけが与えうるものを求めたりもらったりすることにかかっているのです。(ラスキン242)

ここでラスキンは、あたかも男女間に能力の「優劣」がないというために話を始めているようだが、彼がほんとうに主張したいのは「男性の領域」と「女性の領域」はまったく別であり、その領域を逸脱するならば「幸福と完成」は得られない、ということである。そして彼はこの引用のすぐあとにそれぞれの「領域」を定義する。

> さて、両性の特質を簡単にいえば、つぎのとおりです。男性の力能は、積極的・進取的・守護的です。男性はすぐれて行動者・創造者・発見者・擁護者です。男性の知性は思索と発明にむいていますし、その精力は冒険に戦争にまた征服に ── 戦争が正当、征服が必然であるかぎりですが ── むいています。ところが女性の力能は戦闘でなくて統治にむき、女性の知性は発明や創造にではなく、気持ちの良い秩序・整頓および決定にむいています。女性はものごとの性質・要求点・所在を看取します。女性の偉大な職能は「賞賛」です。女性は闘争にかかわりあいませんが、闘争の王冠をあやまたずに決裁・授与します。女性は、その職分と地位によって、あらゆる危険や誘惑から保護されているのです。
>
> 男性は、世間での荒仕事で、あらゆる危険や試練に遭遇しなければならない。したがって男性には、失敗・罪科・不可避の過誤もつきものです。しばしば男性は傷ついたり降伏したりしなくてはならないし、方途を誤ることもあり、またかならずかたくなになるものなのです。しかしそのかわり、男性はこれらすべてのことから女性を守ってやります。が、その家のなかは女性に統治されるわけで、女性が自分で求めでもしないかぎり、なんの危険も誘惑も、過誤・罪科の原因もはいるわけがありません。これが家庭というものの真実の性質です ── 家庭は「平安」の場所であり、すべての恐怖・疑懼・分裂からの、避難所です。(ラスキン242)

ここにえがかれている男女の関係は、戦いにでかける中世の騎士と王妃をイメージしたものである。また女性が家庭を「統治」しているのだということによって、ラスキンはあたかも、女性とは家庭において絶対的な権力をもつ高貴な王妃のような存在だ、といっているようにみえる。だが、「男性は自分の学ぶ語学なり学問なりを、徹底的に知らないといけませんが、女性のほうは、これとおなじ語学なり学問については、夫の喜びに、また夫の最善の友人たちの喜びに、同感できるようになる程度に知っておればよろしいのです」（ラスキン249）といって男女の教育のあるべき姿について述べる場面などでは、ラスキンの意図がけっして女性崇拝にあるのではなく、彼は女性に反感を持たせずにしかも父権制を正当化しようとしているのだということがあきらかになる。ケイト・ミレットが『性の政治学』で述べているように、実際に彼が意図しているのは、男女の「気質的相違を生物学的相違により正当化する」（ケイト・ミレット180）ことにすぎないのである。

もちろん、当時、このような意見ばかりだったわけではない。このような意見に対立する代表的な例は、1869年に公刊されたジョン・スチュアート・ミルの『女性の解放』（原題は『女性の隷属』）である。1867年に女性参政権の問題をはじめて議会にたいしてはかったミルは、当時の「男性の領域」「女性の領域」を自然なこととして受け入れようとする態度にたいして、「不自然というのは、がいしてそういう習慣がないということを意味し、通常おこなわれていることは、みな自然にみえる」（ミル54）だけなのだと述べている。

> 従来女性はその自然的発達にかんするかぎり非常に不自然な状態に抑えつけられてきた、そのため、その性質は、非常にゆがめられ、偽装されたものとなった。もし女性の性質が男性のそれのように自由に発展するのを許されていたならば、そして人類社会のそのときの状態からして必要な、しかも両性に同様にあたえられる条件のほか、人為的な偏向が一切女性の性質にあたえられないものとしたならば、女性の本来の性質と能力とは、男性のそれにくらべていかなる実質的な相違を示すであろうか、いやしくも相違というようなものがありうるとは、だれもいえないであろう。男女間に現在存在する相違のうち、もっとも争う余地のないものですら、それはもっぱら環境によってつくられたものであって、生まれつきの能力の相違でない……。（ミル122-123）

これをまとめるならば、「男女間に存在すると考えられる精神的な相違は、すべて教育と環境の相違にもとづく自然の結果にすぎないということ、それはなんら性質上の根本的相違を示すものではなく、ましてや根本的な劣等性を示すものではない」（ミル116-117）ということであり、男女間の差異は、自然（nature）によって生来的に決定されたものではなく、教育（nurture）などの外的な環境に由来するという立場である。

しかしこのようなミルの主張は、進化論の影響下に生物学的決定論の流行をみていた19世紀後半において、認知された主張とはなりえなかった。たとえばチャールズ・ダーウィンは「ミルを尊敬してはいたものの、彼が科学に無知であることを遺憾に思って」（ラセット23）おり、「ミルは自然科学からいくつかの事柄を学ぶことができたはずだ。［中略］男性がその活動力と勇気とを獲得するのは、生存闘争、（とくに）女性の所有を求める闘争においてなのだ」と批判的に語ったという。この彼のコメントは、「男は、女に比べて大きな体、強い腕力と精力をもち、

より大胆で好戦的であるが、これらの特性は原始時代にすでに獲得され、その後、主として、女を手に入れるために競争相手の男たちと争うことによって強められた、と結論してよいだろう」というかたちで、『人間の起原』(1871) のなかでくりかえされていく（ダーウィン542)。

こうして、性差が進化の結果生じた生物学的な差異として規定されていくなかで、ミルは「科学を無視した人物として退け」られたのである。

6. 遺伝と環境

犯罪者が生じるのは先祖がえりという遺伝的要因によるのか（「生来性犯罪者」という観念を呈示したロンブローゾ)、それとも劣悪な環境によるのか（ラカサーニュ）という問題が犯罪学の重要な争点になっていたように、「遺伝か環境か」という問題は、19世紀後半のさまざまな学問分野においてもっとも基本的な問いとなっていた。

そしてそれは男女の能力差をめぐる問題についても同様だった。男女の能力差は生存闘争をつうじて少しずつ人間の自然（nature）に刻みこまれていった生来的なものなのか、それとも教育その他の要因（nurture）によって生じた後天的なものなのかということは、ダーウィンがミルを批判したエピソードのなかに典型的にあらわれていると言ってよいだろう。

男女の性差がたんに後天的なものだとするミルの立場は、女子教育の必要性をうったえ女性の法律的権利と職業的機会の獲得をめざすフェミニズム運動と容易にむすびつくものであったことは言うまでもない。女性が男性と同じくらいすぐれた知的活動をするためには、教育などの環境を整えればいいし、整えなければならない ── 実際に、ケンブリッジ（ガートン、ニューナム）とオックスフォード（サマーヴィル、レイディ・マーガレット・ホール）に女子学生用のコレッジがつくられるのは、思想的にはミル的な立場に立ってのことだったであろう。

しかし女子教育や女性の社会進出を主張するすべての進歩的な人びとが、性差の後天的要因を強調するミルの立場に立ち、それに反対する保守的な人びとが、性差の生来的要因を強調するダーウィンの立場に立っていたという考え方は、かならずしも正しくない。女性が男性なみに肉体的・精神的・知的に努力することによって、より以上に人類の進化を進めることができる ── 女性の教育や社会進出の意味をそこに見いだしていたグレアム夫人の例にみられるように、進歩的な人びとのなかにも、じつは自分たちの主張を進化論の枠組みのなかで展開しようとする立場があったからである。

おそらくそれほどまでに進化論的イデオロギーが支配的だったということなのだろう。「科学に無知である」という理由でミルを批判したダーウィンの例が端的に示しているように、当時は、ある主張が科学的であると認められ、そしてそのことによって説得力をもつためには、それは進化論の枠内に位置づけられる必要があったのだ。

したがってケニーリの論文は、このようにして進化論的に根拠づけられた「新しい女」の立場を、エネルギー保存則を援用しながら、グレアム夫人と同じ進化論的土俵に立って論破するために書かれたものだったのである。エネルギー保存則と進化論というふたつの科学に依拠しているものとして、それは当時のイデオロギー的磁場のなかで、その磁場にもっとも合致するかたちで書かれていたのであり、われわれが滑稽だと思うのと同じくらい、当時の人びとには科学的だと感じられる論文だったにちがいないのだ。

しかし20世紀になると、女子教育や女性の社会進出、婦人参政権などの法律のもとでの女子

の権利を主張する人々は進化論的決定論の論理を離れ、男女間の性差をもっぱら環境的要因に帰するようになる。たとえばヴァージニア・ウルフは、1920年代にケンブリッジ大学の女子学寮、ガートン、ニューナムの両コレッジでおこなった講演をもとに、『自分ひとりの部屋』(1929) を発表する。そのなかでウルフは、シェイクスピアのような女性の作家が生まれるためには、女性が「500ポンドの年収と自分ひとりの部屋」をもてる環境が整わなければならないのだと言い、性差は環境に由来すると明言している。またボーヴォワールは『第二の性』(1949) の冒頭で、「人は女に生まれない。女になるのだ」という印象的な言葉によって、性差は人為的に作られるものだということを示している。そして、1960年代のウーマン・リブ運動がまきおこしたさまざまな議論を統合するものとして1970年に出版されたケイト・ミレットの『性の政治学』も、男女間の性差は生物学的根拠を持たない文化的産物であるということを主張したのである。

こうしてミルの『女性の解放』から130年をへた現在、性差をほとんど環境に由来するとした彼の主張はようやく認知され、性差にかんする進化論的決定論は完全に破産しているようにみえる。20世紀とは、男女をめぐる思想においては、性差を自然 (nature) であるとする19世紀的な生物学的決定論からの脱却、解放の歴史としてながめることができるのである。

註

1)「家庭の天使 (Angel in the House)」は1850年代に成立した女性観で、あくまでも従順に夫に仕え、慈しみ深く子どもを愛し、その清純さで男性を道徳的に高める女性を意味する。コベントリー・パトモアの『家庭の天使』(1854-62) といった文学テクスト、あるいはダンテ・ゲイブリエル・ロセッティをはじめとする数々のラファエル前派の絵画的テクストにその表象を見いだすことができる。「病気に封じ込められた女性が精神的純潔さの視覚的等価物」ということで、「病弱崇拝」という現象をも生み出した。詳しくはダイクストラ、第2章を参照。

2) エネルギー保存則を人体に応用し、それをヒステリーの治療に適用したのが、アメリカのウィアー・ミッチェル博士である。彼の治療法は「安静療法 (Rest Cure)」と呼ばれた。この療法では、ヒステリーなどの女性の神経疾患は人体エネルギーが不当に消耗させられたのが原因であると考え、読書やものを書くこと、散歩、入浴まで禁じてベッドにいることを強制する徹底的な安静や、低カロリーの食餌療法を患者に命じた。当時、多くの女性がこの療法をうけたが、なかでも有名なのはアメリカの作家シャーロット・パーキンス・ギルマンである。周知のごとくギルマンの『黄色い壁紙』はこの治療を受けた女性が狂気の縁に追いやられていくさまをえがいたものであり、ミッチェル博士はこれを読んだあと自分の治療法を変えたといわれている。イーディス・ウォートンやヴァージニア・ウルフ、アメリカの哲学者ウィリアム・ジェイムズと小説家ヘンリー・ジェイムズの妹であるアリス・ジェイムズなどもこの治療を受けていた。詳しくはDiane Price Herndl, chap. 4を参照のこと。

3) 女性にとってもっとも大切な役割は母親になることであって、女性の社会進出は「女性の領域」を逸脱する、好ましくない行為であると考えていたケニーリは、特別に例外的な進歩的女性だったわけではない。アメリカで最初に医師免許をとった女医、エリザベス・ブラックウェル (1821-1910) も同様な意見だった。彼女は1852年におこなった講演をまとめた著書 *Laws of Life, with Special Reference to the Physical Education of Girls* のなかで、「女の子の発達の目的はただひとつ、母親になること」であり、「少女が自分の身体に気をつけなければならな

いのは、母親になるための完璧な身体を作るため」だと言っている。また、女性は人類の母親であるからその役目は神聖で重要なものであり、女性はその優しさや人をいたわるという特有の性質を発揮して、家族にとって医者のような役割をするのは好ましいが、自分の野心を満たすために医者という職業に就くべきではないと考えていた。詳しくはMargaret Forster, chap. 2を参照のこと。

4) ラスキンは『ごまとゆり』のなかで、理想的な家庭についてつぎのように書いている。「家庭が神聖な場所、ウェスタ（純潔をあらわすローマの炉の女神）の神堂、つまりローマの『家庭の神々』の守護する炉火の神堂であって、その神々の前へは、この神々が愛をもって迎える人々しかいけないものである限り — こうして、家庭と炉火がじつはもっと高貴なおおいであり光であるかぎり、つまり、『疲れた地にある大きな岩のかげ』であり、また荒海のファロスの灯台の光である限り、 — それだけこれはまさに『家庭』という名を守り、それへの賛辞に実を与えるものなのです」（ラスキン242-43）。

引用文献

Dijkstra, Bram. *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siecle Culture* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1986)

Forster, Margaret. *Significant Sisters* (1984; Harmondsworth: Penguin Books, 1986)

Herndl, Diane Price. *Invalid Woman* (Chapel Hill and London, University of North Carolina Press, 1993)

Kenealy, Arabella. "The Talent of Motherhood", *The National Review* 16 (1890), rep. *Gender and Science: Late Nineteenth-Century Debates on the Female Mind and Body*, ed. Katharina Rowold (Bristol: Thoemmes Press, 1996) 243-58.

Woolf, Virginia. *A Room of One's Own / Three Guineas* (Oxford: OUP, 1992)

ダーウィン、チャールズ『人間の起原』（『世界の名著50　ダーウィン』）［池田次郎・伊谷純一郎訳］中央公論社、昭和54年

ボーヴォワール、シモーヌ・ド『第二の性』［生島遼一訳］人文書院、1966

ミル、ジョン・スチュアート『女性の解放』［大内兵衛、大内節子訳］岩波文庫、1984

ミレット、ケイト『性の政治学』［藤枝澪子他訳］ドメス出版、1991

ラスキン、ジョン「ごまとゆり」『世界の名著52　ラスキン　モリス』［木村正身訳］中央公論社、昭和54年

ラセット、シンシア・イーグル『女を捏造した男たち』［上野直子訳］工作舎、1994